

河野眞治先生のご退職にあたって

河野眞治先生は平成27年3月31日をもって、本学を定年によりご退職されます。先生の32年半の長きにわたるご貢献に心より感謝し、本号を退職記念号として発行いたします。

先生は山口県長門市（三隅町）のご出身で、京都大学経済学部をご卒業の後、一橋大学大学院経済学研究科に進まれました。博士課程を終えられた後、昭和57年10月に専任講師として経済学部を迎えられ、昭和60年2月に助教授、平成5年2月には教授に昇任されました。国際経済学とりわけ国際産業やアメリカ経済がご専門で、教育、研究、学部及び大学運営など様々な面において活躍され、経済学部はもとより山口大学の発展に寄与されました。

先生は半導体産業、電気通信産業そして航空産業といったグローバル化の進展を考える際に重要となる分野を対象に、国際環境の変化のなかでの規制緩和と競争に焦点を当てた研究を続けてこられました。ご業績のなかでも、1985年の「半導体産業における国際競争」、1986年の「アメリカ電気通信産業における規制緩和と競争」に始まり2007年の「アメリカ携帯電話産業における競争と集中」に至る一連の論文において、農業、工業に次ぐ第3の産業革命を牽引するといわれる情報通信技術を主軸に、「規制された独占」というアメリカの産業構造の特異性を踏まえ、グローバル化の進展に伴う「独占から競争」への転換さらには「集中」への過程を明らかにされました。

本年1月22日におこなわれた最終講義では「多国籍企業と課税問題」という題目で、新たに取り組まれているご研究について講義されました。タックス・ヘイヴンを中心に、多国籍企業の租税回避策について、事例を交えながら興味深くご説明いただきました。その際、先生がタックス・ヘイヴンという言葉に出会われた

のは、井上ひさしの『吉里吉里人』であるとのこと説明がありました。吉里吉里国の独立への思い、そして人、モノ、金がグローバルに行き交う現代社会でタックス・ヘイヴンに活路を見出そうとする関係国の思惑とが二重写しになり、1冊の本との出会いの重要性を改めて認識したご講義でした。

先生は教育においては、学部の現代世界経済論やアメリカ経済論を、また大学院では国際産業研究の講義を担当され、多くの学部学生や大学院生を世に送り出されました。学生を連れて中国に行かれるなど、一貫して国際経済に対する学生の理解力の向上に意を尽くされました。

学部及び大学運営面においても多くの委員を務められました。教務委員会、国際交流委員会、研究科運営委員会等の各種委員会委員長をはじめ、学生部委員、附属図書館副館長、評議員、学部長などを歴任されました。大学を取り巻く環境が大きく変わるなか、様々な難題を抱えながらも粛々と物事を進められ、学部の舵取りをされました。

この度、定めによりご退職されますが、先生の長年のご尽力に心より感謝申し上げます。また、これからも先生との絆が末永く続きますよう切望するとともに、先生のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

平成27年3月31日

山口大学経済学部長 成 富 敬